

[報告]第27回歴史地震研究会シンポジウム
「描かれた江戸，撮された東京」開催報告

(財)地震予知総合研究振興会* 松浦 律子

東京大学地震研究所† 西山 昭仁

Report of the symposium on “Drawn Edo, Shot Tokyo”
at the 27th meeting of the Society of Historical Earthquake Studies

Ritsuko S. MATSUURA,

Earthquake Research Center, ADEP, Chiyoda Build. 5F 1-5-18, Sarugaku-cho, Chiyoda-ku,
Tokyo, 101-0064 Japan

Akihito NISHIYAMA

Earthquake Research Institute, University of Tokyo, 1-1-1, Yayoi, Bunkyo-ku,
Tokyo, 113-0032, Japan

§1 はじめに

第27回歴史地震研究会研究発表会は実に18年ぶりに東京大学地震研究所で開催された。通常研究発表会ではその地域に即した内容で公開シンポジウムを開催してきたが、今回は会員の研鑽のため歴史地震研究の基となる知識を得られるシンポジウムを行うこととした。東京大学地震研究所にも共催していただき、東京という都市の変遷について学ぶ機会として、小澤氏に江戸時代、佐藤氏に終戦直後の東京について講演していただいた。その後北原会長に江戸から東京への継承と変化を語って頂き、最後に武村副会長の司会で質疑討論の時間を持った。以下に、まず三講演の要旨を挙げ、最後に拝聴した会員の一人としてまとめを記す。プログラムは本号134～5頁を参照されたい。

§2 描かれた江戸のイメージ

最初に、江戸東京博物館都市歴史研究室長の小澤弘教授に、標記の題でお話しいただいた。先生はモナコへ出張前日のご多忙の中、

ご参加いただいた。以下が講演概要である。

この発表では描かれた江戸のイメージをみていく。モナコにはグレース・ケリーの望んだ日本庭園が造られ、その隣にある施設グリマルディ・フォーラムで今夏、日本に関する展覧会「京都—東京 サムライからマンガまで」が私も監修参画して開催されている。モナコでは地震はあるがあまり大きなものは今までない。しかし、隣国のイタリアには火山帯があり大きな地震が何度も起きているし、スペインでも地震がある。

2005年に江戸東京博物館で歴史地震研究会が開催された折には、広重の《名所江戸百景》に見られる安政江戸地震(1855年)後の風景の分析について発表をした。私は、絵画資料の分析に、都市風俗や都市景観の視点を含めた研究を行っているが、一方で文献資料の研究も行っており、かつて柳沢信鴻の『宴遊日記』(13年分)を共同翻刻した。この日記には、天気や地震などの記録が克明に記録されている貴重な文献資料である。

さて、都市江戸が形成されはじめたのは16世紀末であり、まず徳川家康が江戸に入って(1590年)から戦国大名の城郭と城下町として造られ、慶長八年(160

* 〒101-0064 千代田区猿樂町 1-5-18 matsuura@adep.or.jp

† 〒131-0032 文京区弥生 1-1-1 akihito@eri.u-tokyo.ac.jp

3)の江戸開府以降は將軍家の拠点・江戸城のお膝元の中心として発達し、城と町の両方とも普請やインフラ整備が大規模に展開した。

津山藩御用絵師の鋏形蕙齋紹真により文化六年(1809)の江戸の俯瞰図《江戸一目図》屏風の元になった図は、同じ絵師による《江戸名所之絵》とも《江戸鳥瞰図》とも呼ばれる享和三年(1803)の一枚摺りの大大判の版画である。これには270近くの地名情報が含まれており、これを元にして大画面に肉筆画として描いたのが《江戸一目図》である。この江戸鳥瞰図は、現在建設中の東京スカイツリー(634m)がある墨田区業平あたりの上空から江戸の町を俯瞰したような構図で描いているのである。これ以降、この定型の江戸鳥瞰図がコピーされて大量に作られるようになるが、それ以前の江戸鳥瞰図は《江戸図》屏風が幾つか知られている程度で数は少ない。江戸鳥瞰図は、まるで上空から見下ろすように描かれている図であり、ディテールは細かい。しかし、ほとんどの町家が白く描かれているために江戸の町はほとんど土蔵造であったかのように誤解されるが、これは絵師・蕙齋の略画技法であって、一つ一つ現実通りに描くことを省略したものである。実際の江戸の町は、同時代(約200年前)の《熙代勝覧》絵巻(ベルリン・アジア美術館)のように、日本橋通りでも土蔵造の家屋はそれほど多くなく、木造の家屋が多くを占めており、表側だけを漆喰で塗り込めた塗屋造りの家が多かった。

描かれた江戸のイメージには、アバウトに捉えた部分とディテールを捉えた部分とでは異なったものになる。描かれた地域は、部分図としては浅草・上野・隅田川流域が非常に多く、《江戸八景》(中国の《瀟湘八景図》に倣ったもの)は、やがて名所の広がりとともに拡大し《名所江戸百景》となっていった。これらに含まれる名所には、現在の台東区・墨田区にあたる地域の風景が多い。《名所江戸百景》の中には、それに次いで王子(北区)あたりの風景が多く、その地域の料理屋などが出版資金などを出したためと想像する。全体的に見ると、描かれた江戸のイメージは「水辺の都」であり、水辺と住宅密集地の町場と、そして江戸の名所地を描いている。これには、江戸時代以前の歌に詠まれた「名所(なごころ)」ではなく、人為的に造られた人の

集まる場所としての近世の「名所(めいしょ)」(上野山下・両国広小路・浅草など)へと展開していったという特徴がある。幕府天文方であった渋川春海が作った地球儀からは、18世紀初頭には地球を球として捉える考え方が日本に既に入っていたことが窺える。

江戸は埋め立てによる陸地の増加によって拡大していき、埋め立て以前は本所・深川(現在の墨田・江東区)などの御府内の東側は低湿地帯であり、家康が江戸に入って以降、日比谷の入江をはじめとし、隅田川下流の東側などが埋め立てられた。江戸の御府内は、現在の千代田区・中央区にあたり、中央区は主として町人地、すなわち下町(御城下町)の地域が多かった。神田・日本橋・京橋・新橋の地域である。江戸の都市域は、水害・火災・地震などの災害を受け、人口の増加、都市の災害対策や市域拡大政策、武家屋敷の配置転換などによって拡大していったため、文政元年(1818)には幕府老中が相談の上、拡大した市域を確定するために《江戸朱引図》が作成された。江戸はかなり拡大した都市域を有しているが、朱引や墨引の縁にあたる部分は、事実上まだ村である場合が多く、街道沿いに片側町や両側町が形成されていたのが実態であった。江戸の中央部から西側は台地であり、東側は低湿地帯であって、掘割や河川によって水路が張り巡らされていた。

近代以降の東京は、拡大する首都圏構造を持った都市として展開しており、山手線の内側の南側あたりがかつての江戸らしい江戸にあたる。現在の東京は面的広がりを有した都市構造を持っている。大正10年(1921)の《大東京鳥瞰図》によれば、隅田川河畔には工場の煙突が建ち並んでいた。元々隅田川下流の東側は武家屋敷が多くあり、また深川の永代寺や本所の回向院の周辺には町場化した場所があったが、その他は武家屋敷と田畑や木場などであった。このような地域(現在の墨田・江東区)が武家地の開放によって明治期以降急速に町場化して、水と水運を利用した工場が建ち並ぶようになった。明治40年(1907)の《大日本東京全景之図》に見る東京の市街地には、隅田川に鉄橋が架かっている。明治初年頃の土産用に作られたと思われる肉筆画の《江戸鳥瞰図》には、先述した《江戸一目図》を模倣したものであり、季節は春で、

隅田川堤には桜花が、両国橋の隅田川両岸では小屋掛興行が行われている様子が分かる。この絵図では、土蔵造と思われる白壁の蔵が続いているが、実際の風景はこのようではなかった。

都市の風景としては、神田山を切り崩した神田川沿いの河岸の高いところに緑がある。江戸と東京の風景の異なる点は、江戸の場合、武家屋敷の内には緑があるが外にはない、寺社の境内や鎮守の森、堤上や郊外の他には緑の地が見られないことである。番町あたりの下級の武士の屋敷は板塀で囲まれているために、外に樹木があるという風景はない。明治期以降の仕舞屋造りのような家の前に樹木があるように時代考証とかで時代劇にしているが、これは誤解であり、都市江戸には表通りには樹木はなく、寺社や武家屋敷の内側のみに樹木が多いという風景である。江戸の原風景として、《浅草寺縁起絵巻》に描かれている観音示現譚の隅田川があり、隅田川の渡しを越えて他の世界（陸奥国、あるいはあの世）へ行くという風景のイメージが、江戸時代末期まで続いていた。つまり此岸と彼岸の境界の役割を隅田川がイメージとしてもっていたということである。

徳川家康が征夷大將軍になった時点では、幕府が十五代までも続くとは思っておらず、幕府体制が安定したことを確信した上方の商人・職人たちが江戸へ来るのは、1670～80年以降と考えられる。幕府の三代將軍徳川家光が誕生し、四代・五代と將軍が続いてようやく徳川政権が盤石な体制になり、そして明暦の大火（1657年）後も新たな町づくりが行われていった。徳川家康が入って戦国大名の城下町の時代からはじまり、將軍家のお膝元の城郭都市として建設されていく江戸の町は、1630～40年までは橋梁・堤・堀割・武家屋敷・町人地などのインフラの建設工事が大規模に、継続的に行われていた。武蔵野台地の東側先端部に江戸城が築造された際に、日比谷入江が入りこんでいたため家康は江戸城への水害を危惧し、また軍事や物資輸送などの水利面での水辺の重要性を意識しながら、水捌けを考慮して平川の流れを日本橋川と神田川の二筋に分けて隅田川へ流した。また同時に、隅田川下流の東西に堀割を整備した。大名屋敷の周囲にも水路が廻らされており、江戸は日常的に水が流れて

いる都市であった。東京時代になると、昭和20～30年頃に戦災の瓦礫と土砂によって、江戸城の外堀を含めた堀割が埋め立てられている。江戸の天下普請では全国の大名が江戸に集められて、大勢の技術者や人足によって堀割整備が実施された。

江戸は江戸城を中心に方位性を持って都市設計され、また江戸の大地図は一枚を除いてすべて西を上にして描かれている。それは、江戸城に向かって東側から入ってくるのが大手前の通り（メインストリート）であったためと思われる。江戸の町人地は、60間四方の京都の町割りをモデルにして整備されているが、日本橋より北側は3度ほどひしやげた方形の町並みで作られている。それは、古来からの浅草へ抜ける道を基準に、つまり浅草御門へ向かう本石町通りや本町通りが作られたため、わずかながら中山道との交叉が90度にならなかったためと思われる。

江戸の町人地は、堀割の掘削と埋立を繰り返しながら整備されていき、東側へ展開していった。町人地は主として通りを挟んだ両側町で形成されており、基本は街道筋沿いに町が作られていき、正方形の街区割りによって町が展開していった。江戸ではメインストリートを中心として町並みの風景が作られていき、角地にある角櫓を持った三階建て家屋以外は二階建てが主であった。しかし、明暦の大火（1657年）以降は三階建てはなくなり、最大が二階建ての家屋となった。隣に合わせて家屋を建てていくという住宅基準であったために、結果として町並みの揃った街区が形成されていったのである。このことは《熙代勝覧絵巻》を見るとよく分かる。《熙代勝覧》は、巻頭に書家の佐野東洲の手になる「熙代勝覧」という大書のある絵巻であり、文化2年（1805）の江戸日本橋通りの光景を描いたものである。神田今川橋から日本橋までの日本橋通りに沿って、商家88店舗と通りを往来する人々1,671名が描かれている。

《江戸名所図》屏風（出光美術館所蔵）には、江戸建設途上の風景が描かれており、横長の絵巻のような場面展開の屏風であり、場面が隅田川・浅草寺あたりから始まり、埋立が進行している築地、芝のあたり、品川宿へとつながっていく。隅田川沿いに人々が行き来する姿が描かれており、舟が多く見られる。寛永寺は、将

軍家の菩提寺という聖域を表現しており、神田川に架かる浅草橋あたりから三社祭の行列が描かれている。平将門を祀る神田明神は御府内から御府外(神田川の外)へ移転させられたあとの様子で、観世一世一代能の興行場面。また、日本橋の近くにあった遊里の元吉原が描かれる。吉原は明暦の耐火後に郊外の浅草へ移転させられた。築地には、人形浄瑠璃や若衆歌舞伎や軽業などが興行しており、都市の労働者や諸大名の家臣団などが見物に来ており、それによって地面が踏み固められていった。その踏み固められた土地を後に武家屋敷地にしていった。東海道筋の江戸への入口のあたる芝口の両側には湯屋があって、そこで身を清めて都市江戸へ入っていった。これは、室町時代の京都の七口に湯屋が設けられており、そこで身を清めて洛中へ入っていったことと同様な思想ではないかと思う。芝居小屋は、1720～30年代までは天蓋(屋根)がなかったために、雨が降れば平土間席は濡れる状態であった。高台で見晴らしの良い場所には、愛宕山や湯島天神といった新しい名所が作られていった。増上寺は寛永寺と並ぶ将軍家の菩提所である。1620～30年代の建設途上の江戸には、藁葺屋根の家屋も描かれている。ちなみに材木や物資は、潮の干満の差を利用して、満潮時に陸へと揚げられた。

江戸時代は河岸地が有効に活用されていたが、明治期以降になると河岸地に建造物が建てられていったために、水辺の風景が変化していった。当時の絵師は、当時の人々が当時の人間として感覚的にわかるように描いているため、時代を経た現代では、そこから絵師のメッセージを受け取るために当時のことをよく知る必要がある。

江戸は参勤交代に随従して国元から単身赴任してきた武士が多く、また商人や職人も男の比率が多かった社会である。江戸時代初期には米河岸や材木河岸などの河岸地は、物資の荷上場であるとともに置場(倉庫)を兼ねていたが、都市の拡大や火災・水害の発生によって、1630～40年代には米蔵や、竹蔵など材木や薪炭類を保管する蔵は、隅田川沿いの浅草・本所・深川などへと移転していった。薪については、将軍家や御府内の大名屋敷で消費するものと、隅田川の東側で消費するものとは扱う商人と河岸地が異なっ

ていた。江戸時代後期になると、利根川水系から隅田川への水運を利用して栃木あたりの薪炭類が江戸へ運ばれ、本所・立川(立川)沿いに薪炭屋が連なっており、北斎の《富嶽三十六景 本所立川》にその様子が描かれている。

都市では生成と破壊(焼亡)の繰り返しが常に進行しており、建設されるものと没落するものが同時に存在しているのが実態である。

《江戸図屏風》(国立歴史民俗博物館蔵)は、三代将軍家光の事蹟を描いた寛永期の作品である。家光時代の江戸城は、東海道筋や中山道筋から江戸へ入ってくる西国や東北の諸大名たちに見せるために、一番高い吹上よりも手前(海側)に突き出して天守と本丸御殿を設計したと考えられる。江戸城の掘割の表側(東側)は石垣積みによる堀割であり、裏側(西側)は土手造りの水堀である。その頃は、江戸城の西側は直属の家臣団の屋敷地で固めていた。江戸は、武家屋敷地と町人地とが明確に切り分けられていた。江戸時代初期の武家屋敷には、桃山様式の豪華絢爛たる彫刻装飾のある御成門や正門が備えられていたが、明暦の大火(1657年)以降は、大名家に贅を尽くさせてお金を使わせた建築物はなくなった。江戸時代初期の町人地は、正方形の街区の通りに面した部分に家屋が建てられており、正方形の真ん中は入会地になっていたが、時代を経るに従って裏長屋や蔵が建てられていった。

1650年頃までの京都からみた江戸のイメージとして、浅草寺・若衆歌舞伎・人形操り・吉原・隅田川といった名所があった。浅草寺の隨身門は、慶安年間(1648～52年)に作られたもので、恐らくは将軍が隅田川を舟で遡って浅草寺東照宮へ入る際の御成門であったと考えられる。江戸のイメージとしては水辺部が多く、ケンペルが持ち帰った《日本海陸安見図》絵巻(1680年代頃)には、東叡山寛永寺・不忍池などが描かれており、ケンペルが当時の読みで名称の書き込みをしている。隅田川の両岸に道が描かれており、その道の先に「金龍山」と記されている。この当時は待乳山聖天宮を示しており、のちに金龍山浅草寺と浅草観音の山号となった。このように水辺の風景が描かれていき、江戸へ来る人々に対して江戸のイメージを形成していくことに

なる。

以上をまとめると、俯瞰した風景、名所地の風景、通りや川筋の風景というのが、江戸の描かれたイメージとして広く流布し、時代時代に変化していったと言える。

§3 撮られた占領下の東京

次に終戦直後の東京のありさまについて、早稲田大学佐藤洋一教授に、以下の要旨でお話しいただいた。佐藤先生は都市計画など建築工学の出身であるが、「文転」されて現在は社会科学総合学院で都市空間などの面から都市や建築の計画を研究されている。

戦後、アメリカ軍(連合軍)の占領下(1945～52年)にあった東京で撮られた写真について報告していく。リアルタイムで経験がない人が、残された資料から擬似的な体験をすることは可能なかどうか、といった原理的な難しさが常にある。これについては恐らく歴史地震も同じではないかと思う。

記録のタイプによって、記録されている内容の追体験が可能な要素に差異があるのではないか。これは基本的な問題として存在している。残された写真から何が読み取れるのか、生き生きとした町の姿を追体験できるのか、という問題もある。

『熙代勝覧』では描かれている人々が生き生きとしており、町並みだけでなく細かいところにもあたたかみシナリオがあるように描かれている。

写真が何故あるのかといえば、撮られたから写真があり、何らかの形で残されたから写真がここにある。映画監督の大島渚の言葉に「敗者は映像を持たない」とある。占領期の写真を考える上では重要である。敗者は制圧されている側であるため、撮れる領域や対象が限定されている。また、保存・保管に際して敗者のものは軽んじられる。「撮る」ことについて、東京のどこで撮られているのか、何が撮られているのか、どの程度生き生きと撮られているか、という点から考えてみる。

戦災焼失区域図を見ると、隅田川と荒川に挟まれた下町の部分はほとんど焼けており、上野や浅草も焼けていた。

「残る」ことについて、公的・個人的に撮られた占領

軍による映像・写真及び日本側の映像・写真が残っており、記録のタイプによって残り方に差異がある。アメリカ公文書館には占領軍の写真が保管されており、皇居前の写真が最も多い。それはGHQ本部が皇居前広場に面して位置しており、広場は軍事パレードの挙行される場所であったためである。日本側の写真としては『日刊写真通信』のものがあり、占領軍の検閲官が保管していた検閲対象物(書籍・雑誌・地図・レコード・紙芝居など)のコレクションの中に数多くの写真が入っている。当時の日本の写真はほぼモノクロである。占領軍の個人的な写真として、将校によるカラーリバーサルのフィルムで撮ったものがある。当時の公的な写真はモノクロで撮られているが、個人の写真にはカラーで撮られたものがある。富裕層の写真として、当時、麻布の竹屋町にあった屋敷がアメリカ軍によって接收される時の写真があり、日本人の富裕層の家族と占領軍の兵士と一緒に撮られている。庶民にとって戦後すぐの写真は貴重なもので、1年間に何枚撮るかというレベルのものであったため、必ず人物を入れて撮られている。記録のタイプによって、捉えられる都市の表情が異なってくる。

占領軍は戦場で用いていた16ミリのムービーカメラ(100フィート巻、12・3分の撮影が可能)で撮影していた。占領軍側はある種の権力的な存在であったため、個人的には生き生きとした写真を撮りたかったが、なかなか撮れなかった。大部分の写真は、スピグラ(スピードグラフィック)という当時のニュースカメラマンが使用していたカメラ(4×5インチのシートフィルムを用いる)で撮られている。アメリカ国立公文書館にある写真も4×5のフィルムで撮られており、ベタ焼(密着焼)で焼き付けられている。当時のカメラは大掛かりであり、シートフィルムは連写できないので撮れるものには制約がある。

アメリカ軍が始めにカメラを向けたのは市街地の焼け跡であり、空襲による被害状況(爆撃効果)を撮影している。日本人は焼け残っているものから元の場所を類推していくが、アメリカ軍はどのくらい焼けているかに視線を注いでいる。日本人はどれくらい残っているのかを見ており、見ているものが逆である。

写真は、撮った方の意図と読み取る方の意図が変

わってくる。視線の向ける場所が反転している。爆撃効果を見るために、飛行機が北から南、また北へ、さらに南に、とジグザグに飛んでいる映像が残っている。この時点で、飛行機を飛ばして上空から写真を撮れるのはアメリカ軍だけであり、日本側の視点で上空から撮っている映像はない。東京の東の方から西の方へかけて、上空から爆撃効果(どの様に燃えたか)を確認するために焼け跡の市街地が、映像として撮影されている。アメリカ軍が進駐する前の1945年8月27日に、偵察的に爆撃効果を見るために上空から撮影したものである。アメリカ軍が空撮を用いて撮影した爆撃効果(焼け跡)は全体を捉えるものである。アメリカ軍が日本から接收し、活動していた皇居前広場や基地・施設、そこでの生活が撮影されている。また、銀座の写真は大変多く残っている。

占領軍(GHQ)の調査として写真が撮影されており、「スラム」(深川のこと)の衛生状態の調査の際に撮影された、汲み取りやネズミ取りの写真もある。アメリカ軍に接收されていた代々木のワシントンハイツ(現、代々木公園)など、アメリカ軍に接收されていた場所や、浅草の瓢箪池の周囲にあった屋台の衛生調査の写真もある。

占領軍であるために引き出せた表情、日本人であるために引き出せた表情があり、そこからはカメラアイによる権力作用を読み取ることができる。アメリカ人の若いカメラマンの記録によると、日本人はカメラを向けると逃げてしまうというあり、チョコレートを用いて子供を集めて「やらせ」の撮影もしたとある。アメリカ人カメラマンは、自然な日本人の姿を撮影したかったのである。

焼け跡を見ているのか焼け残りを見ているのかという視点の違いが、占領軍側と日本人側にある。アメリカ軍が駐留していたフェンスの中と、外の一般の市街地の写真とは明確に分かれている。同じ東京を見ているはずであるが、違う地図を描いている。City Map of Central Tokyoという、占領軍が何度も版を重ねた地図があるが、隅田川より東側の市街地は描かれておらず、占領軍の施設があった西側の市街地に寄って描かれている。占領軍の東京への視線は、田園調布など接收した住宅地のある市街地の西側へ寄っている。

アメリカ軍は東京の市街地の東側を重点的に爆撃

しており、延焼した後の地図には東側は描かれていないという、皮肉な状況が生じている。占領軍にとって、東京の市街地の東側は衛生状況など調査のために行くところであり、日常生活を記録するという写真はほとんどない。

行動様式に従って、記録されるものに違いがある。注目すべきは、公的なアメリカ軍の記録では、些細な写真なども大切に保管しているのが、資料にアクセスしやすい。しかし、日本側の公的な記録は残存しているがアクセスが難しいために、アメリカ軍のものばかりが目に入ってしまう。それによって、アメリカ軍側の視点が強くなってしまい、読み取れる事柄が限定されてくるのではなかろうか。また、個人的な写真には多くの種類があり、一般的な様式を導き出すことは難しいと言える。

以上で見てきた写真・映像には、撮られて残されたものの他に、撮されたが失われたもの、撮されなかったものもある。それら全てを含めたものが当時の東京であったはずである。

フレームの外側、つまり写真で見えない部分をどのように考えるのか。撮られて残されたことに相応の理由があり、恐らく現実のほとんどは撮されていないと考えることができる。あるいは、撮されたが失われたりどこかに保管されたりして目に触れていないこともある。

カメラを向けると人々が逃げてしまう場合、実際は見えているものが、カメラを通すことによって見えなくなってしまうことがある。逆にカメラだからこそ見えるものもある。そのため、撮されているものの質や距離感が変化してくる。

残された記録のタイプによって、行動の範囲、カメラの振る舞い、眼差しの質などが異なってくる。例えば、俯瞰している写真は占領軍の公的な写真しかない。残っている画像によって、記録も規定される面がある。そのため、それぞれの記録のタイプの限界を知る必要がある。有り得たかも知れない記録もあり、このような喪失した記録も考慮して、撮されているものの前後や外側も考えていく必要がある。

§4 変わらぬ江戸・変わる東京

最後に北原糸子会長から、江戸と戦後東京と

の間を埋める講演があった。

江戸の都市をどのように考えるのか。江戸の場合は、始原が極めて理想的な存在であると考え、これは、儒教における堯・舜の時代に理想政治が行われたとする発想と同じである。江戸の場合は、現実には変わることを考えていても、スタイルとしては元へ戻るという発想であり、進歩の概念を前面に出さない、隠された進歩ともいべき発想を持った都市である。

近代の都市は、前進すること、進歩すること、変化することを最大の目標として都市計画を進めてきており、前近代と現代の都市には理念の違いがある。理念の違いによって、それを遂行していく技術の違い、技術の継承のあり方に違いがある。日本の場合には個人の伝承、口伝によって伝える技術が基本であるが、近代以降に入ってくる技術の継承は、教育による開かれた形で、普遍的に説明できる、誰もが獲得できるものとして展開される技術である。

前近代と近代には、理念の違いから発して、スタイルやそれを支える組織力に相違点がある。江戸と東京を結ぶ共通点としては、都市の性格として、江戸は何れにしても江戸時代の首府であり、東京は近代の首都であるために、人口圧力による都市の拡張については両方の都市において共通性があり、都市を膨張させていく内的な圧力になる。それは都市機能の拡充に繋がる。

変わらぬ江戸について、絵図や地図からみていく。江戸の都市構造は、三代将軍徳川家光の時期、江戸城の外堀が完成する寛永十三年(1636)頃に大体の形が決まった。それ以降は、明暦の大火(1657年)以後、寺院の移転や大名屋敷の移転が行われたが、大きな改変は行われなかった。当時は、始原に帰るという回帰力の発想に基づいているため、新しいことを社会が共有して同意する発想にはならなかったためである。

江戸では、城郭の周辺には武家地・町人地、ある程度遠くに寺社地というように、地域の棲み分けと管理がそれぞれ別個に行われた。江戸の町人地は人口が増大して拡大し、隅田川以東の町地化(町奉行の支配地化)は17世紀末になって進行していく。これには、内圧的な人口の拡大があり、17世紀末～18世紀初め、

八代将軍吉宗や五代将軍家綱の時には、江戸に滞在する家臣団の増大によって武家地が拡大していった。町人の人口も増加していき、周辺の百姓地が面的ではなく街道に沿って、18世紀半ばに町地化していった。八代将軍吉宗の時代には町人地内部の整備が行われ、町火消の制度や町組の制度が整備された。江戸は拡大を進めながら内部の整備を行っていき、人口の拡大に伴って江戸の範囲が不明瞭になったため、調査を行って朱引図が拡大していった。江戸内部の拡大は現状の追認であり、都市計画に基づくものではなかった。江戸城は、台地と低地の両方にまたがって縄張りをしている。江戸の前島の地盤の良いところに、最初に東海道が通され町割りが行われた。

都市図の最初は木版刷りの絵図であり、後で色が付けられた。江戸では、寛永九年(1632)に木版刷りの都市図(『武州豊島郡江戸詳図』)が出ており、京都や大坂など他の都市に比べて突出して早い時期に出ている。幕府の直轄都市である三都(江戸・京都・大坂)のうち、寛永期に出された江戸の木版刷りの地図は、江戸の都市の有り様を示すために幕府が作らせた可能性がある。江戸時代に都市の地図を出版するには許可が必要であり、三都以外には木版刷りで大量に流布するような都市図は発行されていない。幕末期になると、下田など特別なところは地図が作られているが、他の都市は手書きの地図が作られているのみである。江戸の市街地は、東海道と浅草橋に抜ける本町通りが基本街路となって町割りが形成された。江戸中期頃までの地図には、下町の周辺や隅田川の東側が描かれている。延宝八年(1680)になっても、江戸の西側にはほとんど関心が示されず、地図には載っていない。町屋や通りはあるが地図には掲載されていない。幕末期の朱引図・墨引図には、町奉行によって寺社による勧進の範囲が決められており、人口増加によって周辺の農村部が市街地化していった状況がわかる。周囲の四宿(千住、板橋、品川、内藤新宿)では、飢饉や安政江戸地震(1855年)の際には特別に警備が固められており、都市を防衛する発想があった。

変わる東京について、明治以降の都市の制度的な変化についてみていく。明治二十一年(1888)に市制・町村制が成立し、東京市が成立するのは明治二十二

年(1889)である。当時の東京市は旧15区の範囲である(山手線の内側の範囲)。明治二年(1869)、最初に50区に分割する計画があった。その後、何度かの改変を経て明治六年(1873)の段階で大区・小区制がある程度安定することになる。

明治十三年(1880)の市区改正の論議の中で、道路の泥濘を解消して幅員を拡張することや鉄道の敷設などの問題が諮問された。この論議の中心議題は、「帝都」を主張するか「商都」を主張するかの二大論議であった。当時の東京商工会議所会頭であった渋沢栄一が中心になって、兜町をビジネスセンターとし、東京築港を行って貨物の取引を横浜から東京へ移設することを計画し、「商都」としての東京を考える議論を市区改正で行った。一方、東京府知事の芳川顕正や内務省が中心になって、道路や交通体系を整備して「帝都」としての偉容を形作ることを計画した。市区改正の論議は、論議としては長く続いたが、実際に市区改正ができた事例は、予算の関係もあってそれ程多くはなかったと考えられている。大正三年(1914)に市区改正は一応完了したが、論議の対象になった問題のほとんどは関東大震災後の復興に際して着手されるものであった。東京築港問題については震災復興でも大きな論議になるが、横浜港の被災によって「横浜の復興は横浜港の復興である」という課題が大きくなり、渋沢栄一が主張するが通らないままに引き継がれることになった。

大正十二年(1923)の関東大震災の発生に際して、大正十二年九月二日午後7時に赤坂離宮の広芝の御茶屋で震災内閣の認証式が行われている。東京の市街地はまだ炎上しており、写真が撮れないために手書きであった。九月四日には第一回の正式な閣議決定が行われており、花押やローマ字を用いて署名がなされている。各大臣が署名をしている仮閣議決定書があり、これは後藤新平案の原案になるものである。九月四日の午前中に閣議が開かれ、帝都復興に関する根本方針を後藤新平が提議しており、形になるのは六日である。この根本方針には、帝都復興事業には国民の協力が必要であり、公共の建物は国費を用いて復興するとある。帝都復興事業の基本方針は、罹災後の整理、事業の区域を決定、計画案の作成、交通

系統(電車・鉄道・河川・港湾)の決定、上下水道・ガス・電気などの地下埋設事業の推進、通信機関の整備、建築物の制限、金融機関の復活など総花的なものであった。現実には資金がないために復興会社に委ねることになった。帝都復興の手順として、九月十二日に詔が出されて東京は移転しないとされた。天皇の権威を利用して、具体的に帝都復興を推し進めることになった。九月十九日の勅令によって復興審議会が設置され、同二十一日に第一回審議会が開催されており、同二十七日には勅令によって復興院が設置された。2ヶ月後によく第二回審議会が開催された。

街路計画による復興道路については、53の幹線(幅員22m以上)は国が執行し、122の補助線(同22m以下)は東京市が執行し、区画整理内の道路(同11m以下)は国と東京市が主体となって執行することになった。道路の幅員の決定は、舗装費用や用地買収費用を算定する上で重要な問題である。復興計画では、復興小学校と公園がセットになって作られている。また、現在の重要な道路は関東大震災後に作られている。この道路計画の一号線と二号線の決定に約2ヶ月を要したとされている。帝都復興時の街路に関する都市計画は、戦災を越えて現代にまで生きている。

震災当時の東京市の人口は約250万人で、約150万人が被災して、約100万人が地方へ移住したとされている。これらの人々が元の場所へ戻ることは困難であり、東京市の人口は震災後しばらくは元に戻らなかった。東京市の人口は震災後に減少するものの、周辺部での宅地開発によって都市が拡大していき、昭和七年(1932)には、人口が増加してきた周辺部の5郡82ヶ村を編入して、「大東京」の東京市が成立した。なお、明治二年(1869)の東京市界が一番狭くなっており、江戸時代の朱引が狭くなった段階を示している。

江戸から東京への制度変遷については、次の3つに分けることができる。19世紀後半の明治維新期の市町村制による区画・区域の変化は決定的に大きかった。19世紀末の市区改正が目指したものはその大半が実現しなかったものの、近代都市としての都市計画を目指したものであった。20世紀前半の震災復興は現代都市の基本軸を作ったものである。

§5 シンポジウムを聴いて

秀吉は小牧・長久手の戦い後に、家康の力を弱めることと、京・大阪から遠いところへ置くという意図で国替えをして家康に江戸を渡したのだらうと推測する。一方家康も1590年に江戸に入ると、武蔵野台地は水の便が悪く、低地部は湿地帯が広大に広がり、石高に見合わないはずれ領地と当初はかなり落胆したのではないかと想像する。しかしその江戸を、日本で最も広い関東平野の玄関口という自然条件を生かし、治水や水運を中心に見事な都市計画で、今日の東京へと基礎を築いたのは家康である。この後、何度も水害や地震、火災に見舞われながらも、250年後の幕末には、上下水道相当の仕組みを備えた、当時世界でも類を見ない清潔な100万都市へと江戸は発展した。今日の良くも悪くも集中した日本の首都としての東京の基盤は江戸時代の遺産だ。パリもその広さの必然からフランスの首都になったと同様、東京も近代までに大都市になる宿命があったのだらうが、家康達の最初のプランが良くなければここまでの発展と膨張はなかっただらう。しかしその膨張こそが、徳川政権が衰退していく要因でもあったのだが。

今回3つの講演を聴き、改めて江戸初期のグランドデザインがあつてこそ、維新も、震災も、戦災も超えて今日まだ膨張を続ける大都市東京をもたらしたと再認識した。今でもある程度以上の重量物は水運で運ぶが、昔は殆どが舟で運ばれた。水路交通からみた正面に江戸城天守閣を据えて、景観でも入京者を圧倒する都市計画の構想能力は、現在の混迷する復興計画と比べずとも、当時の徳川政権の上り坂の活気が感じられる。また、飛行機も高い塔も持たないのに、まるで見てきたように鳥瞰図を書ける江戸時代の絵師の能力にも驚かされる。ナスカの地上絵も、この鳥瞰図を描いた人と同様の才能で天空の神に絵を捧げたのかもしれない。

これまで、地震被害の大きい地域を見るたびに、関東地震後や東京大空襲後、福井地震後を実体験した先輩達は、あれに比べれば、と尺度が飽和しない姿勢を示された。東日本大震災の被害地を航空写真による海岸部の広域的变化として見られる我々は、飽和しない尺度を各自の中に持つことになった。

写真の威力は大きい。しかし撮影されなかったモノもあつたことをこれからは注意したい。濃尾地震後の被災民の写真より、今回拝見した占領下の敗戦国の国民の写真の方が、表情が圧倒的に明るい。現代のアフガニスタンやイラクの戦闘後とは比較にならない素直さで“民主化”された日本が写っている。敗戦は一般には相当の安堵感を与えたのだと推察される。

現在国民の1/3が関東地方に集中している。朱引や墨引などを行っても、昔も今も都市の膨張は方向の誘導程度は可能でも留めることは不可能のようである。大規模火災被害は最近見られないが、水害や地震災害の危険は増加するばかりである。歴史に学んで少しでも地震災害に強い都市になるような、平常時の営みというものがないものだらうか。関東震災の時には後藤新平や渋沢栄一が居て、三日後には復興根本方針が出されたという。東日本震災の被災者には羨望の布陣であろう。民主主義は手続きが煩雑で、それが重要であることは重々承知していても、政治が貧困であれば何も決まらず時間ばかりが過ぎていく現状は歯がゆいばかりである。現代の我々は政治に全く期待できない分、大震災後には自立した市民として、行動力と叡智を個々が発揮することに期待しなければならない。

小澤氏の話で紹介があつた《熙代勝覧》は、最近地下鉄三越前駅の連絡通路に面した、三越日本橋本店地階の外壁に、複製が常設展示されている。(http://www.mitsuifudosan.co.jp/corporate/news/2009/1130/index.html に案内があるので参照されたい。)霞ヶ関の文部科学省横には江戸城の堀の石垣が残され、常時観察可能である。このように最近江戸時代の都市に触れる常設展示場所が都内各所に増えているように思う。またNHKで「ブラタモリ」という、昔の東京の痕跡をたどる趣向の番組が二シーズンにわたって放映され、好評だったようだ。今後も機会を捉えて、時間経過も加えた四次元の都市景観の把握に努めたいと思う。

当日は地震研究所の方々も参加して文化的な質疑応答にも聞き入り、大変充実した時間であつた。講演頂いた三氏に感謝申し上げる。